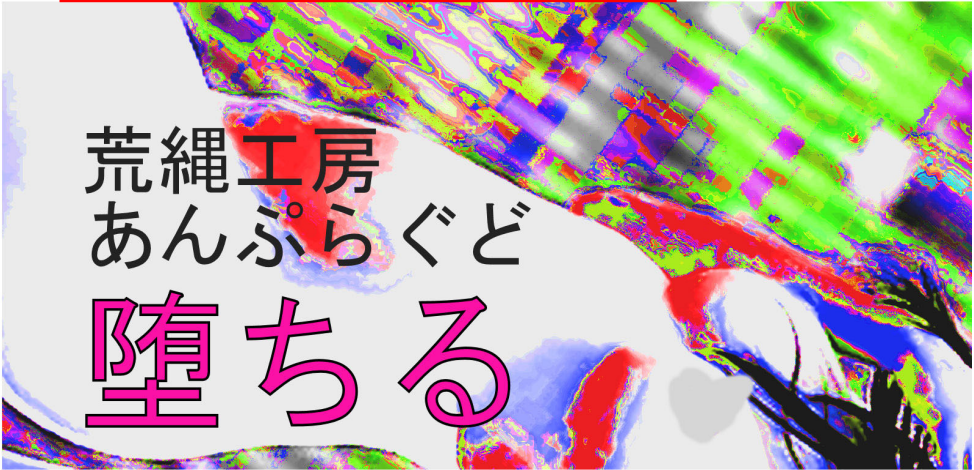


見本 試読 SAMPLE



荒縄工房
あんぷらぐど
墮ちる

明日菜編02+

自虐者
明日菜の
夏休み・冬休み

見本 試読 SAMPLE



見本 試読 SAMPLE

S M 小説

堕ちる

明日菜編〇二十ぜろにふらす

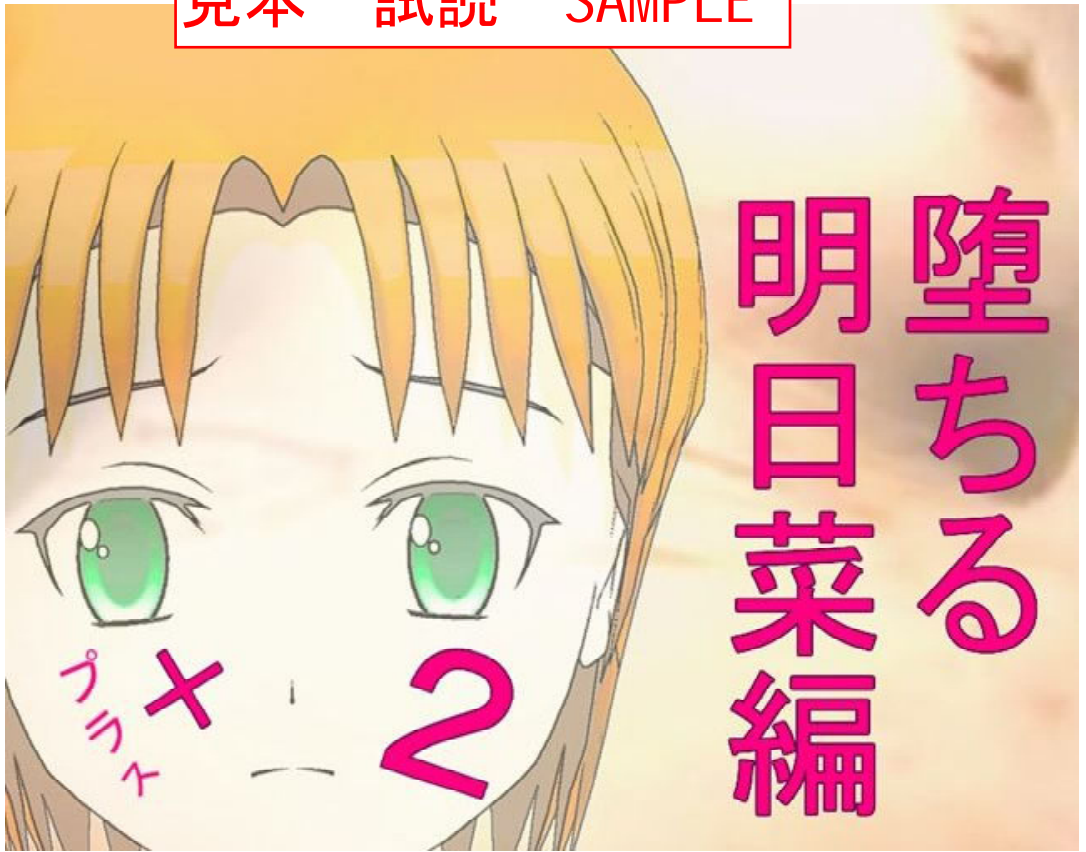
明日菜の夏休み&冬休み

あんぷらぐど著

荒縄工房



見本 試読 SAMPLE



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにやふにや」「あんぷらぐど」名でS M小説を執筆。独自の自虐的S M、一人称による告白形式の作品、伝奇S M小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

小説墮ちる明日菜編〇二 10

イントロダクション 11

人間便器 12

汚物処理 39

廃棄物になるまで 55

具夜中の訪問者 79

ノコギリ裂き 92

豚の途中 117

入村儀式 143

村の掟 164

パートナーチェンジ 198

見本 試読 SAMPLE

ワイルドなコンビ	208
お魚責め	217
海に見える宿	238
女体盛り	256
明日菜スペシヤル	269
逃げ出す	297
自虐登山	309
彼に出会った	320
彼の背中で縛られて	334
またしても尻焼き	365
明日菜の帰還	376
自由が欲しい	388

自虐娘が行く 4 0 0

自虐者・明日菜の夏休み 4 0 9

①めざめ 4 1 0

②ゴム 4 1 8

③やさしい痛み 4 2 3

④プール 4 3 4

⑤買い物 4 4 3

⑥男物 4 5 2

⑦失敗 4 6 0

⑧外でする 4 6 7

⑨はじめての針 4 7 6

⑩野外 4 8 6

- ⑪ 初浣腸 4 9 5
- ⑫ 初体験 5 0 8
- 自虐者・明日菜の冬休み 5 2 6
- ⑬ 極寒浣腸 5 2 6
- ⑭ 夕暮れ露出 5 3 6
- ⑮ 大掃除 5 4 4
- ⑯ コタツ 5 5 3
- ⑰ 干支責め 5 6 2
- ⑱ 書き初め 5 7 1
- ⑲ スケート 5 8 0
- ⑳ 局所冷凍 5 9 0
- ㉑ スカナアイス 5 9 9

②② 自縛詣で 6 1 0

②③ 成人式 6 2 1

②④ 夜の公園 6 3 1

おまけ 蛇女 6 4 0

奥付 6 5 0

小説

墮ちる

明日菜編〇二

イントロダクション

明日菜のつたない話に、しばしお付き合いください。自虐に熱中していたOLの明日菜ですが、職場の後輩・知加子に知られ、スポーツジムで知り合った阿久という男もまじえて、奴隷にされたのです。

そして会社に損害を与えたということで会社の奴隷にされてしまいました。社長の娘で役員の純江さんたち酷い目に遭っていたのが前回までのお話です。

人間便器

給料日。

懐かしいです。毎月二十五日にはお昼休みにはATMへ行き、お財布に少し万札を入れて。買うわけではありませんが、会社帰りに都会のアダルトショップへ立ち寄り、いろいろな道具を見ます。勇気がないので、罰として以外では、その場で買うなんてできませんでした。

ホームセンターに行くこともありました。フードコートで夕飯を一人で食べますが、頭がボワンとしていきます。いろいろな工具や道具を見ると、それだけ

で自虐の血が騒ぎ、あれもこれも買って、自分の体を責めるために使いたい……。

だけど、あまり買わないのです。

たいがいは通販で買っていました。少なくともネットで購入を調べてから買っていました。

ついこの間まで、そういう生活をしていたのです。

それが……。

いまは、地下駐車場の片隅にある部屋というより、ただの囲いのような場所に鎖でつながれています。かつて守衛室だったそうです。

すごく恐ろしい夜でした。

首、手、足。鎖で固定され、その鎖が重くて、ゆとりはあっても、自由には動けません。

誰かが夜にやってきて、明日菜を責めるかもしれない。そう思うだけで恐ろしいのです。

会社はわたしをどうするつもりなのか、どこまで本気なのか、よくわかりません。おそらく、これって犯罪だと思うのですけど……。社員の誰かが、思い切つて告発してくれたらうれしいんですが……。

明日菜のために、そこまでやってくれそうな人が浮かびません。

自動車が出入りする音、タイヤの鳴る音。人の足音。奥の階段につながる鉄のドアが開閉する音。

そのたびに、びくびくしていました。

気付くと、守衛室の窓から、知加子が覗いていました。

朝なのです。

「眠れた？　眠れないか。でも、いいな明日菜は。毎日、そればかりだものね。社畜としてどう？　今日も自虐する？」

すぐに返事はできません。

「今日って、給料日よね。みんなウキウキしているわ。あなたにもきつといいことがある」

いいことなんて、あるわけがないのです。

「上に連れて行く」

たとえば自殺しようとしている人を、どうせ死ぬのだからと、ボコボコにして殺すことって、どうでしようか。わたしはそれは違うと思います。

自虐者^{じぎやくもの}として自分で好きで自分の体を潰していかうらとって、「どうせ潰すんだから、好きにしたっていいだろ」という理屈にはならないはずです。

なにか、そこにはストレートに結びつけられないものがあるのです。臍臓の病気で余命いくばくもないからといって、刺し殺されてもいい、ということにはならないわけで……。

だけど、純江さんや知加子は、そうは思っていないみたい。

どうせ、ろくな死に方をしない明日菜なのだから、自分たちの欲望の捌け口にしてもいいだろう、その方が明日菜も幸せだ、なんて決めつけているのではないでしようか。

きつと、そうです。

首輪にロープを通して手綱のように知加子がしっかりと持ちます。

それから、右手のチェーンを外し、左手の枷と手錠でつないでから、左手のチェーンを外しました。

その間、脇にキャトル・プロツドつまり牛追い用の電気ムチをはさむようにして持ちながら。常にわたしを威嚇するのです。

手が後ろでつながれたら、知加子は安心したようです。

「いい子ね。暴れたらだめよ」

足のチェーンを外されました。

「みんなのところへ行こうね」

階段から上がるのかと思ったのですが、違うのです。駐車場のスロープを、知加子の持つ電気ムチの先端をお尻に感じながら歩かされます。

「ねえ、外に行くの？ 外はダメよ。このかつこうで外なんて」

「明日菜。あんた、そんなこと心配しなくていいのよ。ペットみたいなものなんだから、わたしがよければど

ここにだって、そのかつこうで行くの」

「えー、だって……」

「だってじゃない」

グイツと電気ムチの先がお尻に刺さります。

「ふふふ。スイッチは入れないわ。あなたが言うとおりにしていればね」

昨日そして今日。さらに知加子は強くなっているようです。彼女は彼女で、妄想をたくましくしていたに違いありません。

明日菜をどうしてやるうか。明日菜がどんな顔をするか。どんな声を上げるか。

正直、逆の立場だったら、わたしもワクワクして眠

れなかつたかも……。

まぶしい明かり。

曇っているのですが、朝のオフィス街はかなりの人通りがあります。まだ、早い時間なのでしようけど、明日菜は全裸で奴隷のような姿をさらしているのです。

「どう、外の空気はいいでしょ」

一角を一周して、正面から社員たちと一緒に建物に入ります。

恥ずかしすぎます。みんな顔見知りなのですから。

「階段を上がるのよ」

エレベーターはめったに使わせてくれないでしょう。社員たちの冷たい目。あの中には、昨日、わたしを

犯した人もいるはず。だけど、温かみのない表情。もしわたしがペットなら、みんな笑顔になってくれるはずなのに……。

五階まで上がると、そこに純江さんがいました。社長室も会議室もドアが開いたままです。

「おはようございます」

知加子が挨拶をすると純江さんは事務的に。

「入って」

首、手足の金具は思った以上に重いので、わたしはけっこう疲れています。

「へえ。楽しそうだな」

あの男です。

ジムで知加子と手を組んで、明日菜をいじめた、阿久という探偵。

ビシツとしたスーツで決めています。パツと見はイケメンでも、品のない目つきです。

奥から社長がやってきて、阿久に書類を渡しました。

「これでいいかな」

「ええ。大丈夫です」

阿久は書類に目を通しながらうれしそう。それをカバンに仕舞います。

「阿久さんとは、明日菜のコンサルタントとして契約した。明日菜の取り分から自動的に阿久へフィーを払う形になるね」

社長は満足そうです。

知加子はわたしを見ます。

「明日菜、よかったわね。阿久さんがあなたのことをフオローしてくれるのよ。あなたのあらゆる権利を彼は代理するの。財産の処分についてはすでに阿久さんが進めてくれているわ」

「財産といっても大したものはない。預金が少しあつたけどね。自虐OLはけっこう貯め込んでいたね」

震えがきます。

わたしのものが、すべて他人のものになってしまふ……。わたし自身を含めて。

「しばらくは部長以上の役員専属の奴隷として働いて

もらおうかって思ったんですけど……」

純江さんが言います。

「なるほど。ですが、お忙しい役員の方にはこんな手間のかかるやつはかえって面倒ではありませんか？

明日菜がちゃんと役員のみなさんに喜んでもらえるように、社員のみなさんと一緒に鍛えるというのなら、わたしも大賛成です」

阿久がニヤニヤ笑っています。

「おう、そうしてくれ。こっちは忙しいんだ。そいつが、必要なときに必要なことをしてくれさえすればいい。飽きるまで使ってやろうじゃないか」

社長はそういうと、「役員会議だから」と会議室へ入

ってしまいました。

エレベーターがやってきて、役員たちがぞろぞろと会議室へ。

裸の明日菜をじろつと見る人もいれば、あえて無視する人もいました。この会社では、役員全員が男です。以前、部長職に女性がいたのですが、それは社長の愛人で、いまでは別会社の社長です。

「あ、いけない、朝ごはんの時間です」
知加子がうれしそう。

「任せるよ」

阿久は知加子の肩になれなれしく手を置きます。しかし、同時に純江さんと目配せをしているのを、わた

しは見逃しませんでした。

あらあら。知加子はもう捨てられるのかしら。男なんて、どうせそんなもの。

少しうれしくなったのですが、知加子に四階に連れて行かれると、うれしさも吹っ飛んでしまいました。

女子トイレの個室の一つが、改造されているのです。壁が取り払われ、剥き出しの便器が置かれています。その便器の下部はピカピカのステンレス。飛行機のトイレのような印象ながら、形はかなり違い、跳び箱のような台形。

蓋と便座がついています。

壁には鉄の輪が何カ所か埋め込まれています。

「ついさつき、便器が取り付けられて、やっと完成したの。阿久さんのおかげよ」

「知り合いの工場にムリを言って作ってもらったんですよ」

知加子が便器を横に倒します。大きな空間があります。棺のような人の形。

「ここに仰向けになりなさい」

やけにやさしく知加子が言います。

「む、むりです……」

怖じ気づいてしまいます。

「おとなしくしないと電気よ」

知加子は電気ムチの先端を乳房にあてます。

「わかりました」

だめ、そんなの、ぜったいにできない……。

震えが止まりません。

しやがみ、それから冷たいタイルに足をゆつくりと伸ばします。

知加子が手錠を外しました。

「そこにちゃんと仰向けになつて」

床に人の体に合わせて窪みがあつて、水が流れていくのです。

頭にあたるところに、大きな排水口があります。

体をその上に横たえました。仰向けになると、天井が高い気がします。狭いので足は伸ばせません。水が

冷たい。ぶるぶる震えてしまします。

「上半身からやるのがいいよ」

阿久が言い、便器を元に戻します。

それは、まさに棺の蓋です。わたしの上にかぶさつてきました。

ひどいけど、よく考えられた仕掛けです。

両手を出せるえぐれた部分があつて、右手はそのまま壁に固定されます。水を流すスイッチを押す役目です。左手は角度をつけて支柱に縛り付けられて、トイレットペーパーのホルダーの役目。

オツパイは便座の足元にはみ出しています。

足首の枷を通ったロープが、壁の鉄環をくぐって引

っ張られて、足を開いたかたちで上に持ち上げられます。お尻が浮き上がります。

これは苦しい姿勢です。

この便座ってどっち向き？

「試していいかしら」

純江さんが言います。

「第一号よ。男性はもう出てくださらない？」

阿久は追い出されました。

純江さんがわたしの上に座ります。明日菜の足の方、つまり壁のほうを向くかつこうになります。

そうです。この向きなら、用を足す人は、うっかりわたしと目が合ってしまうことはありません。

ただ座り、用を足せばいいのです。

純江さんがパンツを脱いで明日菜の上に座りますが、よく見えません。すぐ暗くなってしまうました。

「純江さん、これをつけないと」

「あ、そうだったわ」

純江さんが立ち上がり、透明なプラスチックの漏斗のようなものを便器にセットしました。

さつきまでなら、汚物を顔に浴びることはあっても、口で受ける必要はなかったのです。

ですが、この漏斗によって、もう避けられなくなり
ました。

口の中に先端が深く入り込みます。

純江さんの放尿は長く、激しいものです。その水流が余さず明日菜の口に入ってきてきます。

全部が飲みきれぬわけではなく、あふれて顔の左右に流れてしまいましたが、とにかく一度は口に入るのです。

そして、そのほとんどを飲んでしまうことになりました。

純江さんのおしっこ。なんだかちよつと上品な気がします。彼女のつけている高級な香水のせいもあるでしょう。

わたしの手からペーパーを取り、それを丸めて、ゴミ箱に入れたようです。さすがにそれを食べるとは言

わないようです。

靴を脱いだ純江さんが、わたしのオツパイを両足で踏みつけはじめました。

「いいわ、これ。すつごく気持ちいい。足の疲れが取れるわ」

「ホントですか？」

「うん。ホントよ。あなたもあとでやってみなさい」
「はい」

明日菜の足が高く引っ張られているため、彼女の真正面には、V字に開いた股間があります。

「これ、つけるんですしたよね？」

知加子の声がします。

「あ、そうそう。忘れていたわ」
純江さんの指でしようか。

割れ目にそって、やさしく触れてきます。これだけで、もう濡れている明日菜……。

指がクリを撫でて、血液が沸騰していくのに放置され、そのすぐ下に。

「小さいけど、大丈夫かしら」

「平気ですよ。はい、これ」

痛い！

鋭い痛みです。おしつこの穴になにか太いものが押し込まれます。

ぎいいいい。

「このホースをこつちにつけておけばいいわけ？」

「そうです。そうすると、結局、明日菜の便器に循環するんです」

「なるほどね。自分のおしっこも飲むのね？」

「そうなりますね」

指先が今度は性器に。そこは恥ずかしいほど、とろけています。

三本ぐらいの指で、同性とは思えないほど容赦なく揉むのです。

感じる……。

くらくらするほどです。気が遠くなるほど気持ちがいい……。

げええええええ。

突然の痛み。

漏斗を突っ込まれているので、声がうまく出ず、むせてしまいます。

性器にとてつもなく固くて大きなものが入り込んできます。

「ちよつと大きすぎたんじゃない？」

「いいんですよ、それぐらいないと、使えないじゃないですか」

「まあ、そうだけど……」

痛い、痛い、痛い。あそこが裂けそうに痛いのです。なにをしたのでしよう。

ようやく純江さんが靴を履いて、立ち上がりました。視界が開けて、便座越しに自分の股間を見ることができました。

ひどい……。

巨大な金属の筒のようなものが押し込まれているのです。そこにはプレートがついていて「汚物入れ」と書いてあります。

明日菜のあそこを汚物入れにするなんて……。

知加子や阿久が考えそうなことです。

でも、でも……。

明日菜だって考えそうなことかも。知加子はとにかくわたしのブログを熱心に読んでいたから。

異物や汚いものを自分で入れていたのは事実だし。
これから毎日、女子トイレで女子社員の糞尿、汚物の
処理までさせられるのです。

うろうろう。

感じてきました。どうしようもないドスケベの血が
騒いで、沸騰中。ドクドクとおしっこを管に漏らしま
す。自分の尿を飲みながら、アクメに達していました。

奥付

お読みいただき

ありがとうございます。

二〇一三年四月刊行 二〇一九年五月二版

著作権 あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

● ブログ「荒縄工房」

● ホームページ

● 荒縄工房 S M 研究室

● 今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。